



# 標識文庫

---

kenshaku

---

## 勉強嫌いな僕

---

僕の学生時代のことを思い出そうとすると、教室の机のなかに大切にしまわれた教科書たちのことがまず思い浮かんでくる。

そのなかでも国語と社会科の本はとくに綺麗だった。

その二教科にかぎったことではないのだけれど、テストの解答用紙だってほとんど白紙のままの綺麗な状態で提出していた。

国語の長文問題で、『それ』は何を刺すか？ なんて云う問題が必ず出てくるけれど、僕がそんな難問に答えられるはずもなかった。

その頃の僕は漫画くらいなら少しは読むけれど、あの細かい文字が所狭しと並びページを真っ黒にしている読み物なんて、まるで汚物を見るような態度で接していた。

僕がどれほど勉強嫌いだったかで紙面の大半を汚すのは心苦しいのでここら辺りで切り上げ、その本と出会った時のことを書き始めようかと思う。

僕はその日、少し遅れて登校した。

いつもの通学路にほかの学生の姿は見えなかった。30分も遅れて学校につこうというのだからしごく当然の話で、僕はそのことを気にすることもなくゆっくりと歩いていた。

学校までの道順で最後の交差点の信号待ちで、ガラガラとシャッターを開ける店員さんの姿を見かける。

体育館わきの校門をくぐる。

授業中の学校の静けさは、誰もいないのではないだろうかと感じさせるほどだった。

そのまま体育館の横を通り、北校舎の入り口の扉の四角い取っ手を引っ張った。

ガチャ、ガチャガチャ。

ガラスの扉に拒否され、僕は軽いパニックにおちいってしまった。

それでも僕はどこか冷静で、ガラス越しに下駄箱を確認していた。

ほとんどの下駄箱の下段は空っぽで、狭い上段に黒いスリッパが入っていた。

「しまった、今日は日曜日だったっけか？」

と数歩帰りかけた時、午前休校だったのをようやく思い出した。と同時に午後までの時間をどうやって過ごそうか考え始める。

ムフフッと猫背がさらに猫背になりながら、思い付いたアイデアに自画自賛する。

もし誰かこの時の僕の様子を見ていたら、その人はきっと何百匹もの毛虫に背筋を這われるという恐ろしい思いをしていたことでしょう。

ほんとはさきほどの信号待ちでシャッターを開けていた店で時間つぶしができると思い出したからにすぎないのですが.....

校舎の裏口——なぜか開いているのです——から入り込み、階段下のデッドスペースに荷物を隠し、さっそうとそのお店へ。

そのてのお店に共通の匂いに包まれながら、僕は物色をはじめました。

## 10cm×15cmの中に広がる世界

---

僕はその書店で、漫画でも立ち読みして過ごそうとしていました。でも、一冊の漫画では30分もあれば読み切ってしまうそうです。かと云って何冊も立ち読みしていたのでは、かなり居心地の悪い思いをしなくてはならなくなるかも知れない。

だったら……

そう文庫本なら500円程度で買えそうだし漫画よりはるかに効率的だぞ、と考えたのです。

書棚にならぶ高さ15cm程度の背表紙たちが、僕を呼んでいます。漫画のように個性を全面に押し出さず単色使いが多い背表紙の文庫本。その中で一番惹かれたのが、真っ赤な一画でした。

赤のバックカラーに白抜き文字。

その中の一冊を手にとってパラパラとめくると真っ白な上質紙にまず感激して、見開きの下半分近くも真っ白だったことにビックリして、ときどき配置されているカラー写真に目を釘付けにされてしまいました。

でも、ちょっと高価だったので、手頃な値段のものを探し、レジに持っていったのが……

「and I Love Her」

でした。

学校に戻り木工室の階段に腰をおろして、夢中で読んだ片岡義男氏の世界。

都会での生活に憧れ、マンションの一室から飛び立つ蛍光塗料の模型飛行機に想いをはせ、飲んだことのない冷たいビールが喉をくだっていく感触を想像していた。

淡いピンクの桜の花びらが張り付いたオリーブカラーの車も印象的だったなあ。

僕の愛車歴の中にダークグリーンのボディーカラーが多いのは、もしかしたらこの小説の影響なのかも知れないと、今ふと思った次第。

その小説がきっかけとなり、いったい僕はどれだけの小説を読んできたことだろう？

そんな世界を造りたいと考え、どれほどの散文を書き散らしてことだろう？

僕はいま、古代エジプトの物語りを書こうと奮闘している。世界史なんて僕には関係無いと思っていたのに、古代エジプトの一部だけなら普通の人たちより知っているつもりになっている。

もしあの時、書店でその一冊に出会わなければ、いまの僕はいったいどうなっているだろう。

人生の分かれ道で、僕は『至 and I Love Her 著:片岡義男』という標識を見つけ、そちらの方の道を選んだのだろう。

その道が行き着く先は、いったいどんな世界なのだろう？

みなさんの分かれ道にも、そんな標識がきっとあるような気がしてならない。